大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

半構造化面接法によるプルースト現象の特徴の検討

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-07-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川部, 哲也 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005288

半構造化面接法によるプルースト現象の特徴の検討

川　部　哲　也

大阪府立大学大学院人間社会学研究科
心理臨床センター紀要　第 6 号
2013年 3 月

半構造化面接法によるプルースト現象の特徴の検討

川　部　哲　也

Ⅰ　問題と目的

プルースト現象（Proust phenomenon）とは，においとの遭遇を契機として，過去に経験した出来事があたかもそれを追体験しているかのようにありありと思い出されることをいう。作家プルーストによる『失われた時を求めて』の中でこのような現象が極めて印象的に描かれたことから，一般的にそのように呼ばれるようになったという。では実際にプルーストはどのようにこの現象を記載したのか。まずそこから見ていこう。

コンブレーにかんして，自分の就寝劇とその舞台以外のいっさいのものが私にとってもはや存在しなくなってから，すでに多くの歳月の過ぎたある冬の一日，家に帰った私がひどく寒がっているのを見て，母は，ふだん飲まない紅茶でも少し飲ませてもらっては，と言いだした。私ははじめ断ったが，それからなぜか，気が変わった。母は，「プチット・マドレーヌ」と呼ばれるずんぐりしたお菓子，まるで帆立貝の筋の入った貝殻で型をとったように見えるお菓子を一つ，持ってこさせた。少したって，陰気に過ごしたその一日と，明日もまた物悲しい一日であろうという予想とに気を滅入らせながら，私は無意識に，お茶に浸してやわらかくなったひと切れのマドレーヌごと，ひと匙の紅茶をすくって口に持っていった。ところが，お菓子のかけらの混じったそのひと口のお茶が口の裏にふれたとたんに，私は自分の内部で異常なことが進行しつつあるのに気づいて，びくっとしたのである。素晴らしい快感，孤立した，原因不明の快感が，私のうちにはいりこんでいた。おかげでたちまち私には人生で起こるさまざまな苦難などどうでもよく，その災厄は無害なものであり，人生の短さも錯覚だと思われるようになった。その快感がちょうど恋の作用と同様に，なにか貴重な本質で私を満たしたからだ。というよりも，その本質は私の内部にあるのではなくて，それが私自身であった。（中略）私はいま一度自分に問うてみる。この未知の状態はいったいなんであったのか，と。（中略）自分のうちで何ものかがびくっと震え，それが場所を変えて，よじのぼろうとするのを感じる。非常に深い水底で錨を引き上げられたような何かだ。それが何であるかは知らないが，しかしそれはゆっくりと上がってくる。私はその手ごたえを感じとる，それの響きが長い長い距離を通って耳に聞こえてくる。（中略）そのとき一気に，思い出があらわれた。この味，それは昔コンブレーで日曜の朝（それというのも日曜日には，ミサの時間まで外出しなかったからだ），レオニ叔母の部屋に行っておはようございますを言うと，叔母が紅茶か菩提樹のお茶に浸してさし出してくれたマドレーヌのかけらの味だった。（中略）ちょうど日本人の玩具で，水を満たした瀬戸物の茶碗に小さな紙きれを浸すと，それまで区別のつかなかったその紙が，ちょっと水につけられただけでたちまち伸び広がり，ねじれ，色がつき，それぞれ形が異なって，はっきり花や家や人間だと分かるものになってゆくものがあるように，今や家の庭にあるすべての花，スワン氏の庭園の花，ヴィヴォンヌ川の睡蓮，善良な村人たちとそのささやかな住居，教会，全コンブレーとその周辺，これらすべてががっしりと形をなし，町も庭も，私の一杯のお茶からとび出してきたのだ。（鈴木道彦訳『失われた時を求めて』第一篇　スワン家の方へⅠ　集英社 pp.85-93）

長い引用になってしまったが，ここで確認しておきたかったことは，プルースト現象とは，一杯の紅茶という一つの嗅覚刺激を契機として，過去の出来事をありありと，まるで追体験しているかのように詳細かつ鮮明に想起される現象ということである。これは一読して通常の記憶想起とは異なった様相を呈していることがわかる。山本（2008b; 2010）によると，におい手がかりによって想起された自伝的記憶は，他の手がかりによるそれよりも，情動性が高くかつ鮮明であり，追体験感覚を伴い，古い出来事であることなどが報告されているという。また日誌法を用いた研究では，①個人差はあるものの，プルースト現象は１ヶ月に４回程度生起すること，②手がかりとなったにおいは，食品に関するもの（例：コーヒー，レモン）が多く，その特徴として快でかつ感情喚起度が高く，なじみのある（熟知度が高い）ものが多いこと，③想起された自伝的記憶は“料理・食事”に関する出来事（例：家族そろって韓国料理を食べに行ったこと）が多く，その特徴としては快でかつ感情喚起度が高く，古く，追体験感覚を伴う出来事が多いことが示された。

また，臨床心理学の立場からは森田（2008）の質問紙調査研究により，プルースト現象を捉える5つの次元として「感情･気分」「現在と過去の心的距離感」「においと記憶の結びつき」「意外性」「不思議さ・印象深さ」を挙げており，プルースト現象は「プルースト体験」ともいうべき主観的体験であることを指摘している。その主観的側面を見ていくと，フラッシュバックや既視体験との類似性があるという指摘もなされている。一方で，プルースト現象の契機となるにおい手がかりについては，「自然のにおい・街中のにおい」が最も多く（36.1%），次いで「家族・家庭にまつわるにおい」(22.9%),「特定の人にまつわるにおい」(21.7%),「特徴的なにおい・印象的なにおい」（例：建物のにおい，象徴的なにおい，不快なにおい）（19.3%）となっており，山本のデータと異なった結果になっている。これはおそらく調査方法の違いによって，プルースト現象の中にも，記憶に残りやすいものとそうでないものがあるためと考えられる。

このように，プルースト現象についてはこれまでに実験的手法，日誌法，質問紙法により接近が試みられている。筆者はここに面接法による検討を加えることにしたい。面接法には確かに欠点もあり，生起から報告までに時間があるので記憶内容の衰退が起こっている可能性と，想起される自伝的記憶はにおい手がかりの想起効果が十分に反映されているか不明確であるということ（山本2008b）が指摘されている。しかし一方で，森田（2008）が描いた次元は，プルースト現象が生起した瞬間の「主観的体験」に焦点を当てた研究であるところが独創的であると思われる。例えば既視体験がそうであるように，時として，主観的体験は出来事の生起直後にはその体験の意味は曖昧であるが，ある程度時間の経過があるなかで意味づけられ，「私の体験」として根付く場合があるため，面接法によるデータにも意義があると考えられる。しかしもちろん，上記の限界を考慮に入れて分析にあたらねばならないだろう。

本研究の目的は，プルースト現象の特徴を面接法により検討することである。具体的には，①プルースト現象によって想起されるのは，いつの記憶か，②想起内容の感情喚起度（快－不快）はどのようであるか，③何のにおいが契機になるか，④どのように想起されるか（通常の記憶想起との共通点および相違点）を検討する。

Ⅱ　方法

本調査は，「記憶と体験に関する心理学調査」の一連の調査の中の一部として実施されており（結果の一部はすでに川部（2012）にて報告している），質問紙調査と面接調査の二つから成る。まず，心理学関連の講義の授業後に講義室にて質問紙調査を実施した。質問紙調査では①プルースト現象の経験有無と頻度の質問（教示は山本（2008b）を参考にした。質問紙ではまず「においをきっかけに過去の出来事がよみがえる体験」についての質問であることを記載し，その説明として「日常生活において，あるにおいをかいだことをきっかけに，ふと，そのにおいと関連した過去の出来事がよみがえってくる体験」と記した。次に「このような体験を，あなたは体験したことがありますか？」という質問により経験の有無を5件法で尋ね，「その体験は，どれくらいの頻度で起こりますか？」という質問により頻度を5件法で尋ねた。その後，任意で体験内容を自由記述してもらった），②既視体験の経験有無と頻度の質問，③離人感尺度（松下2000）から構成され，最後に面接調査の依頼を行い，承諾した人に連絡先を記入してもらった。なお，質問紙の最初のページには同意書が付けられており，調査内容に同意した人のみ，質問紙調査に参加してもらった。調査協力者は本学大学生176名（男性64名，女性111名，性別無記入1名，平均年齢19.3歳，SD2.7）であった。そして面接調査協力に同意し，かつ調査可能な日時の都合が合った調査協力者は12名であった。面接調査は本学内の研究室において，個別に実施した。面接調査の1回目には既視体験についてのインタビューを行った。原則として，その約1ヶ月後に2回目の面接調査として，プルースト現象についてのインタビューを行った。例外として，既視体験についてのインタビューに時間をかけたため，プルースト現象インタビューは2ヶ月後の3回目，あるいは3ヶ月後の4回目に聴取した場合がある。また，プルースト現象が複数報告されたため，複数回に分けて聴取した場合もある。プルースト現象を体験していない等の理由がある者は今回の分析対象からは除外したため，今回の分析対象者は9名であった。面接内容は調査協力者の許可のもと，ICレコーダーによって記録された。

面接調査は，半構造化面接により実施した。そこではプルースト現象の特徴を聴取することを目的とした。まずプルースト現象の内容を自由に語ってもらい，その後，以下の4つのポイントについて質問を行った。その4つとは，①プルースト現象によって想起されるのは，いつの記憶か，②想起内容の感情喚起度（快－不快）はどのようであるか，③何のにおいが契機になるか，④どのように想起されるか（通常の記憶想起

との共通点および相違点）である。

なお，予備調査および本調査の実施にあたっては，大阪府立大学人間社会学部研究倫理審査委員会の承認を得た。

Ⅲ　結果と考察

1．プルースト現象の統計的特徴

質問紙調査協力者176名のうち，プルースト現象を「全く体験したことがない」が29名，「あまりない」が31名，「どちらでもない」が12名，「時々ある」が83名，「よくある」が21名であった。176名中，147名に体験がある（体験率83.5%）という結果であり，森田（2008）とおおよそ同じ割合であることが確認された。また，体験がある147名についての体験頻度については，「年に一度以下」が22名，「年に数回程度」が64名，「月に数回程度」が45名，「週に数回程度」が13名，「毎日」が0名，無回答が3名であった。年に数回程度と回答する人が最も多かったことから，1ヶ月に4回程度体験するという山本（2008b）の日誌法による結果より少ない報告になっている。質問紙法では一定数の忘却が生じた可能性が考えられ，それだけプルースト現象は記憶に留まりにくい体験であるといえよう。

次に，面接調査参加者9名から，合計16事例のプルースト現象を収集することができた（1人あたり1つの体験が語られた場合が多かったが，複数の体験が語られた場合もあった）。以下，前述の4つの点に従って面接により得られた情報の検討を行う。

2．想起された記憶の時期

16のプルースト現象のうち，体験時期が小学校入学前のものが2事例，小学校時代が6事例，中学校時代はなく，高校時代が6事例，特定不能が2事例であった。高校時代のもの（調査対象者にとっては3年前程度のもの）が約半数あった一方で，小学校入学前および小学校時代のものも約半数あり，約半数は古い時代の記憶と結びついていることが確認された。におい手がかりによる記憶は古いものが多いという先行研究の結果に沿っていると考えられる。

ただし，記憶の時期を特定するのが困難なケースも少なくなかった。実際に特定不能となったのは2事例であるが，それ以外のものであっても，小学校時代ということはわかるが何歳の時であったかがわからないといったケースが散見された。例えば，線香のにおいから，小さい頃よく訪れていた祖母の家を思い出すという例があったが，この場合，想起されたのは一度あった出来事ではなく，「居間でみんなで過ごし楽しかった時間」として，ある程度抽象化・イメージ化された概括的な場面を想起しているので，時期の特定が困難である場合があった。また他の事例のなかで，におい手がかりを契機として，ある風景が浮かぶ。それがいつのことかは，最初はわからないが，その風景がどこであるかが特定されてくると，その場所にいたのがいつだったかが，事後的に推論することによって明らかになってくる，つまり直接的に「いつの記憶だったか」という認識に到達するのではなくて，風景から論理的に推測を行った結果として時期をなんとか特定するに至ったというプロセスをたどったのである。ゆえに，におい手がかりによる想起プロセスは，多くの自伝的記憶想起プロセスとは異なった特徴を有している場合があるといえる。この点は重要であると考えられるため，後に節を改めて論じる。

3．想起内容の種類

16のプルースト現象における想起内容の特徴の第一に，ある特定のエピソードとして語られたことよりも，概括的な場面について語られたものが多かったことが挙げられる。山本（2008b）の日誌法調査においても，概括が44.6%，特定が55.4%という結果であり，におい手がかりからは概括的出来事も多く想起されることが示されている。今回の面接調査においては，概括が10事例（62.5%），特定が6事例（37.5%）であり，日誌法よりも面接法のほうが概括が増える傾向が示唆された。その内容をもう少し詳細に見ていくと，特定のエピソードは「フードコートで家族一緒に食事をしたこと」「小学校の花をしゃがんで摘んでいたこと」などが挙げられる。一方，概括には2種類あるように思われた。一つは，「祖母の家でリビングにいたことや二階で寝ていたこと」というような，祖母の家にまつわる複数の時，複数の場面（この調査協力者は何度も祖母の家に行っていたことがあった）で構成されている記憶が想起される場合と，もう一つは，「以前交際していた人の顔だけ」というような記憶であって，そこにいつ・どこで・何をしているというエピソードが欠けている記憶の場合，つまり概括的な記憶ではあるものの，きわめて断片的な一つの映像として記憶が想起される場合とがある。数えると前者，後者ともに5事例ずつで同数であった。前者は「祖母の家の思い出」として既に抽象化・構造化を経た自伝的記憶であるといえるが，後者は未だ構造化されておらず，自己に統合されていない断片的な記憶であると考えられ，フラッシュバックに近い記憶想起であるといえる。こ

の記憶はエピソードとしての要件を欠いているため，自伝的記憶のカテゴリーに入れることには多少の困難がある。確かにこの体験はプルースト現象に含めていいのかという議論もありうるだろう。しかし，この体験はパッと一瞬のうちに過去のある一場面との強いつながりを見出すことでもあり，プルーストが記述した，「叔母がさし出してくれたマドレーヌのかけらの味」という思い出が一気に現れたという様子と重なるところもあると考えられる。このように，プルースト現象において想起されるのは，特定にせよ概括にせよ，エピソードとしての記憶である場合もあれば，エピソードの形をとらない記憶である場合もあると考えられる。

4．想起内容の感情喚起度

想起内容の感情喚起度の側面として，先行研究においても言及されることの多い，快－不快について検討する。16事例の内訳をみると，「楽しかった」「いい思い出」などポジティブな想起内容が3事例，「車酔いが嫌だった」や「暗くて怖い」などネガティブな想起内容が6事例，快も不快も両方というのが1事例，中立的感情が1事例，感情はなかったというのが5事例であった。ここでいう「感情はなかった」5事例というのは，中立的感情があったというのではなくて，快も不快もなかったと語られたものをカウントした。先行研究では快でかつ感情喚起度が高いものが多いとされていたが，今回の結果はそれと異なり，ポジティブな内容よりもネガティブな内容の方が多いこと，そして，感情はなかったという事例が5つあったということが結果として示され，必ずしも感情喚起度が高いという結果とはならなかった。この結果の中でも感情はなかったと語られた事例については，想起のされ方が特徴的であったので，後の節にて詳細に論じたい。

5．契機となったにおい手がかり

次に，契機となったにおいの種類を検討する。山本（2008b）の分類基準に従うと，「食品」（例：生八つ橋，調味料）4例，「香水」2例，「植物」（例：キンモクセイ）2例，「場所」（例：マンション，磯）3例となった。ここに分類されなかった5例はそれぞれ，「線香」2例，「人」2例，「段ボール」1例であった。今回の調査は少数事例であるため，この結果だけから何らかの傾向を読みとることは困難であるが，先行研究と同様に，食品のにおいがプルースト現象の契機になることが比較的多いことが支持されたといえる。

また，感情一致効果について見ていくと，前述した想起内容の感情がネガティブであった5事例についての契機は，それぞれ食品2例，線香2例，キンモクセイ1例であった。食品2例については，いずれも嫌いな食品のにおいからネガティブな想起内容が生じており，感情一致効果が認められた。一方で，線香2例とキンモクセイ1例は，いずれも嫌いなにおいとは評定されていないため，感情一致効果が認められなかった。

しかし，ここでも面接内容を詳細に見ていくと，感情一致効果の有無について判断することが困難な事例が存在する。一例を挙げると，キンモクセイの事例では，キンモクセイのにおいから，高校生のとき，自転車に乗って通学している朝の場面を想起した。そこから，当時クラスで小テストが毎日のように行われていて嫌だったということが語られた。そして小テストが実施されていない朝が連想されることもあると語られた。一方で，キンモクセイのにおいは好きなにおいであると述べられていた。このような場合は，「好きなにおい」から「嫌なテスト」が想起されたと調査者には感じられるため，感情一致効果が見られない例としてカウントされるだろう。しかし後から確認してみると，「嫌な小テスト」は，キンモクセイのにおいから直接想起されたものではなく，連想されたものであると語ってくれた。つまり，自伝的記憶研究においては，どこからどこまでがその時に想起された記憶で，どこからが連想された記憶なのかが線引きが難しいと考えられる。よって，感情一致効果の有無についても慎重な吟味が必要であることが示唆された。

6. どのように想起されたか

最後に，プルースト現象における想起のされ方の特徴について検討する。まず「感情はなかった」という事例について，面接の一部を具体的に見ていくこととする。

Aさんの語り：（香水のにおいから，一時期よく着ていたワンピースを思い出した事例）＜その記憶の思い出し方？＞なんかその，なんか「場面」ではなくて，その服のことだけを…まあ，その服の形っていうか色とかもちろん記憶してるんですけど，その服がこう，頭の中で出てくるっていう感じで。＜どんなふうに頭の中に出てきた？＞ワンピースなんですけど，そのワンピース全体っていうわけではなくて，ちょうどこの，上半分ぐらいを思い出す。なんか，全体としての形を思い出したんではないんです。（中

略）＜記憶が想起された時の気分？＞気分？…気分(笑)。＜なんともなかった？＞っていうか，ちょっとハッとする感じ。＜うん。嬉しいとか楽しいとか悲しいとか＞そういうものでもないですね。もうなんか,「あっ」っていう感じ,「思い出した」っていう。

Aさんの体験の特徴は，ある場面やエピソードといった記憶が想起されたのではなくて，特定の服（しかも上半分だけ）が頭の中に浮かんだという点である。そこに喜怒哀楽などの感情はなく,「あっ」という驚きと,「思い出した」という感覚だけがある。筆者が「感情はなかった」体験と分類したのはこのような体験のことである。この種の体験では，記憶が単なる1枚の絵画のようなものとして想起されていると考えられる。つまり，Aさんはスクリーンに映された映像を離れて見ている観察者の位置にいる。いわば，自分が関わっていない，自分から遠く隔たったものとして映像が生起するため，そこへの参加が難しく，感情が付与される以前の状態となっていると考えられる。

また，プルースト現象における想起のされ方の特徴として，身体感覚との関連について，いくつか示唆的な語りが得られた。以下にその一部を見ていくこととする。

Bさんの語り：昔，付き合っていた人がいて，2年3年会ってなくて。でも，似たような男の人の，例えば汗のにおいとかで，すごくなんか，思い出すんです。においだけじゃなくて，それに伴ったもの？体温だったり。（中略）＜記憶の想起され方？＞んー，映像っていうか，静止画がパッと出てくる感じですね。カラーで。＜どんな静止画？＞昔，例えば，ハグしてもらったりしたときに，すごく，強く感じるので，その映像，ですね。＜それだとすごく近くない？＞近いです。＜相手の姿が近くに見える静止画が＞はい。っていうかもうなんか見えない。…静止画っていうか，その時の自分の視界，の方が近いですね。

Cさんの語り：（葬儀の線香のにおいから，以前に経験した葬儀を思い出した事例）初めに席に座っているときはあんまり,なんとも考えてなくて,普通にお経とかも聞いてましたし普通だったんですけど，お焼香に行って，自分の席に戻ってきたときに，すっごいドキドキして，バクバクバクバクってこう，止まらなくなって。グワーと自分の中で混ざる感じ，ゴチャゴチャした感じっていうのが，その時に体験したことです。＜お焼香の時にドキドキし始めた？戻ってきてから？＞戻ってきてから，座ってから，バクバクバクバクって感じですね，はい。＜その間に何があったんだろう＞歩いてただけなんですけど，こう戻って，ふとしたときにこうバクバクバクバクっていう感じで，すごい揺れたっていう感じが。感情というかなんか，出てきたっていう感じが自分の中ではして。

BさんとCさんの語りに共通して，記憶が想起される以前の段階で，何らかの身体感覚が生じていると考えられる。Bさんの語りでは，まず映像がパッと出てくる感じと表現されたので，Aさんと同様であると一見思われるが，細かく確かめるとその映像は「ハグされている時の自分の視界」という，映像としては不明瞭な内容ということになっていった。これはおそらく，Bさんのプルースト現象においては，映像という視覚的な記憶像よりも，体温など皮膚で感じる身体感覚の方がより強く想起されていたのではないかと推察される（きちんとBさんの語りを見直すと，記憶よりも先に「体温」に言及している）。また，Cさんの体験においては，何かを想起するよりも先に，心臓がバクバクと早鐘を打つという激しい身体反応が生じていることが特徴的である。このように，におい手がかりはダイレクトに体験者の身体に作用する可能性が示されたといえよう。感情について尋ねると，Bさんは「ちょっと落ち込む」，Cさんは「苦手意識」を最初感じたがその後「思い出すことの大事さ」を感じたという。しかしこれは想起内容を自分の心の中に収める際に生じた二次的な感情であると考えられる。ゆえに，におい手がかりによってまず生じたのは，感情より先に身体状態の変化であったのではないかと推察される。

これらの語りから，プルースト現象においては，通常の自伝的記憶想起と異なり，記憶想起が生じる以前に,「感情付与以前の，一つの映像でしかない記憶」や「感情付与以前の，身体状態の変化」が生じている可能性があるといえる。

山本（2008a）の実験によると，プルースト現象においては，感覚知覚手がかりが自伝的記憶の階層構造における最下層に貯蔵される感覚知覚情報を直接活性化させる「直接的検索（direct retrieval）」が行われているというConway et al（2000）のモデルが支持され

ることが示された。このように，プルースト現象においては通常の記憶検索とは異なり，ダイレクトに自伝的記憶の下層を活性化させる可能性が先行研究によっても示唆されている。なお，その後山本（2008b）はにおい手がかりによって喚起された感情と想起された出来事の感情特性との間に感情一致効果が生起することを示し，におい手がかりによってまず感情が喚起され，それが検索を促進させるという可能性を想定しているが，本研究の結果からは，におい手がかりは感情に先んじて映像としての記憶や身体反応を引き起こす可能性もあることを示唆しているといえる。しかし本研究は事例数が少ないため，感情が先か，身体反応が先かという問題についての一般的傾向を示すには今後の精査が必要であろう。

7. 総合考察

以上の結果より，面接法により収集されたプルースト現象16事例の特徴を検討すると，①想起内容が感情付与以前の映像的記憶であったり，感情付与以前の身体変化であったりする場合があること，②想起内容の時期の特定が困難な事例が散見されること，③想起内容は，ポジティブなものよりもネガティブなものが比較的多かったこと，④におい手がかりと想起内容との間に，感情一致効果が見られる例と見られない例がほぼ同数であったことが明らかになった。ただしこれらの結果は，少数事例から得られたものであるため，どこまで一般化できるかは現在のところ不明である。より一般的な傾向を知るためには，今後の精査が必要であると考えられる。しかし一方で，面接法の長所として，におい手がかりによる記憶想起の特徴について詳細に聴取することができたことは本研究の成果であろう。すなわち，プルースト現象においては，通常の自伝的記憶想起と異なり，記憶想起が生じる以前に，「感情付与以前の，一つの映像でしかない記憶」や「感情付与以前の，身体状態の変化」が生じている可能性があることが示された。このように見ていくと，Jellinek（2004）が指摘したように，プルースト現象とは『失われた時を求めて』の表現に忠実に従うならば，単なる「におい手がかりによる記憶想起」という次元を超えた複雑な心理的プロセスを示しているといえよう。あらためてプルーストの文章を読むと，冒頭に「コンブレーにかんして（中略）いっさいのものが私にとってもはや存在しなくなってから，すでに多くの歳月の過ぎた」状態，つまり，まったく忘却の彼方にあった心的内容が，マドレーヌのかけらの混じった一口の紅茶が口の裏に触れたときに，一気に想起されたとある。ここに，意識的には完全に忘却していた心的内容が，意識上に取り戻されるというダイナミズムが示されており，自身の無意識に触れ，それを意識化する，あるいは意識化しかかる体験であると理解することもできるだろう。

この点は既視体験と共通であると思われる。既視体験もまた，現在の状況と過去の経験とが一致して感じられるという形で，自身の無意識との強いつながりを見出す体験であるといえるからである。またこれは，ユングの言語連想検査におけるコンプレックス反応にも近いと考えられる。

最後に，村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』の記述を手がかりに，プルースト現象について考えてみたい。物語の序盤に，主人公の「私」がピンクのスーツを着た女の子と出会った時の体験が次のように記されている。

> *彼女の首筋にはオーデコロンの匂いがした。夏の朝のメロン畑に立っているような匂いだった。その匂いは私を何かしら不思議な気持にさせた。ふたつの異った種類の記憶が私の知らない場所で結びついているような，どこかちぐはぐでいてしかも懐しいような妙な気持だった。ときどき私はそういう気分になることがある。そしてその多くはある特定の匂いによってもたらされる。どうしてそうなるのかは私にも説明できない。（村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド[新装版]』1985/2005，p.20）*

この記述は，におい手がかりを契機として，ある特殊な心理状態が生起した様子を描いている。ここで自伝的記憶が想起されていればプルースト現象となるのであるが，主人公の「私」は「ふたつの異った種類の記憶が私の知らない場所で結びついているような」感じがするものの，その記憶は明確な形をとらないままであるため，これをプルースト現象と考えることはできないだろう。しかし，本論で明らかにしてきたプルースト現象における「感情付与以前の，身体状態の変化」とこの記述とは類似していると筆者には感じられる。決して重要な出来事として意識されているわけではない記憶が，ほとんど自動的に，まるで映像が勝手に映し出されていくように生起するというプルースト現象の特徴が簡潔に示されていると思われる。そしてこの記述に続いて，次のような記述が続いている。

> *「ずいぶん長い廊下だね」と私は世間話のつも*

りで彼女に声をかけてみた。彼女は歩きながら私の顔を見た。（中略）彼女は私の顔を見ながら「プルースト」と言った。とはいっても正確に「プルースト」と発音したわけではなく，ただ単に＜プルースト＞というかたちに唇が動いたような気がしただけだった。（同書，p.20）

ここで唐突に「プルースト」という名が現れている。そして，ここで「プルースト」という言葉が登場した意味は，物語の最後まで謎のままなのであるが，素直に推測するならば，前述の「私」の体験が，プルースト現象を暗示していると考えられるだろう。その後に物語の中で，「私」がにおいによって不思議な気持ちになる原因は，「私」の意識的な思考回路と，人工的な思考回路との「ジャンクション」が特定の果物のにおいによって切り替わることであると説明される（25章）。この設定はSF的な体裁をとってはいるが，「意識的な私」と「私の中にあって私ではないもの」との接点に「におい」が置かれていることは学問的にも興味深いと考えられる。つまり，プルースト現象は「意識的な私」と「私の中にあって私ではないもの」をつなぐ役割を演じているという，一つの可能性がここに描かれているとも考えられるのである。

ここまで話を拡大して考えると，プルースト現象の奥深さが垣間見える。改めて考えてみると，プルースト現象によって「想起」された自伝的記憶は，本当に「私の記憶」なのだろうか？この疑問は，どのような方法をもってしても解決できないのではないか。プルースト現象によって「想起」された自伝的記憶は，「私の記憶ではないもの」に由来している，という可能性を論理的には排除することができない。しかしその「私の記憶ではないもの」は完全に「私ではないもの」というわけではなく，「私であって，私ではないもの」ともいえるし，「ありうるはずだった私」ともいえる，いわばユングの述べる「影」に近いものであると考えられる。プルースト現象とは，この「影」との関係の樹立であるという側面もあると考えられる。ここまで考察を進めると，プルースト現象も既視体験と同様に，意識の根源的事態を示している可能性があるといえるのではないかと考えられる。すなわち，既視体験が離人感と明晰な意識が両立しうるような事態である場合（川部2006）や，世界の根本的なずれを体験した過程である場合（川部2010）や，言語化不能なある根源的感覚を示している場合（川部2011）があることをこれまでに見てきたが，プルースト現象もこれと同様の，論理を超えた要素を持っている可能性がここに示されたといえよう。

Ⅳ　結論

本研究では質問紙法と面接法を用いて，プルースト現象の特徴を検討した。面接参加者9名から得られた16事例のプルースト現象を分析した結果，以下の4点が明らかになった。①想起内容が感情付与以前の映像的記憶であったり，感情付与以前の身体変化であったりする場合があること，②想起内容の時期の特定が困難な事例が散見されること，③想起内容は，ポジティブなものよりもネガティブなものが比較的多かったこと，④におい手がかりと想起内容との間に，感情一致効果が見られる例と見られない例がほぼ同数であったことである。ただし少数事例であるため，一般的傾向を知るためには今後の精査が必要である。一方で，面接法により詳細に想起メカニズムを尋ねた結果，プルースト現象においては，通常の自伝的記憶想起と異なり，記憶想起が生じる以前に，「感情付与以前の，一つの映像でしかない記憶」や「感情付与以前の，身体状態の変化」が生じている可能性があることが示された。最後に，村上春樹の『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』の記述をもとに，プルースト現象が既視体験と同様に，意識の根源的事態を示している可能性があることが示唆された。

付記

インタビュー内容の掲載を承諾してくださった調査協力者の皆さんに感謝いたします。また本研究は，科研費（課題番号 23730660）の助成を受けました。

参考文献

Conway, M.A., Pleydell-Pearce, C.W.（2000）. The construction of autobiographical memories in the self-memory system. *Psychological Review*, 107, 261-288.

Jellinek, J.S.（2004）. Proust rememberd: Has Proust's account of odor-cued autobiographical memory recall really been investigated? *Chemical Senses*, 29, 455-458.

川部哲也（2006）．既視体験における主観的体験内容についての一考察．心理臨床学研究，24，99-109.

川部哲也（2010）．日常場面における既視体験の特徴―初場面既視体験との比較検討―．大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要，3，17-24.

川部哲也（2011）．既視体験における離人感の特徴．大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床セ

ンター紀要，4，59-66.
川部哲也（2012）．既視体験（デジャヴュ体験）の有無判断についての一考察．大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要，5，21-28.
森田健一（2008）．主観的体験から捉えたプルースト現象．日本味と匂学会誌，15，53-60.
村上春樹（1985/2005）．世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド．新潮社.
Proust, M.（1913）. *A la recherche du temps perdu*. Paris: Bernard Grasset. 鈴木道彦（訳）（1996）．失われた時を求めて1　第一篇　スワン家の方へⅠ．集英社.
山本晃輔（2008a）．におい手がかりが自伝的記憶検索過程に及ぼす影響．心理学研究，79，159-165.
山本晃輔（2008b）．においによる自伝的記憶の無意図的想起の特性：プルースト現象の日誌法的検討．認知心理学研究，6，65-73.
山本晃輔（2010）．自伝的記憶の観点から捉えたプルースト現象に関する研究の展望．*Aroma Research*，11，6-9.